

## サーチライト With Pastor Jon 黙示録 第11章 パート2

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コーソン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録するのを感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りょくさんの為にも、お祈りください。

---

「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにはならない。」ヘブル4:7

メッセージ by ジョン・コーソン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ

<http://joncourson.com/>

7590 Highway 238 Jacksonville, OR 97530

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by Rin

「神の聖所を測れ。聖所の外の庭は測ってはいけない。」(黙示録 11:2)

20年前 (\*1997年収録)、遂にこの個所の辻褄が合いました。

当然ですね。

岩のドームはそのままに、壁が建てられ、神殿が建ち、3年半という限られた期間の間だけみんなが喜びます。

そして、その同じ期間にある事が起こりますが、それがものすごいのです。

「それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと (黙示録 11:3)

患難の真っ只中で何かが起こります。

彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する。」(黙示録 11:3)

二人の証人。

どうして二人かというと、覚えていますか。

復活の朝、イエスの墓に二人の御使いがいましたね。

ヨシュアは二人の斥候を遣わしました。(ヨシュア記 2:1)

「なら、モーセは？彼は12人の斥候を送ったではないか。」

確かに。でも、そのうちの10人は役立たずでした。

ちゃんと働いたのは、たったの二人、ヨシュアとカレブです。

このように常に二人。

イエスが弟子たちを伝道に遣わしたのも二人ずつでした。

すべての事実は、ふたりか三人の証人の口によって確認されるのです。(IIコリント 13:1)

だからここでも、二人の証人が荒布を着て、証をし預言するのです。

でも、彼らを侮ってはいけません。

**彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。(黙示録 11:4)**

ここでちょっとゼカリヤ書 4 章を見て下さい。

ゼカリヤは終末の幻を見えています。

オリーブの木がオイルを出し、オリーブオイルですね、それが金の管を通して燭台に流れ込みます。

イスラエルの人たちにとっては、これは驚きでした。

神殿の灯をともし油が、永遠に流れ出る！

実を採って擦りつぶす必要がなく、永遠にオリーブの木から流れ出る。

これは、油注ぎと光、つまりミニストリーを表しています。

ゼカリヤはこう書いています。

**『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。(ゼカリヤ書 4:6)**

では、この二人の証人、二つの燭台は、一体誰なのでしょう。

大患難の真っ只中に登場する彼らは、荒布をまとった油注がれた預言者で、見ての通り明るく輝いて、聖霊の油が彼らの上にあります。

**彼らに害を加えようとする者があれば、火が彼らの口から出て、敵を滅ぼし尽くす。**

**彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。(黙示録 11:5)**

彼らに触れてはいけません。

**この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力を持っている。(黙示録 11:6)**

荒布をまとい預言している彼らに害を与える者は誰でも、彼らの口から火が出て殺されます。

この二人の証人については、ゼカリヤ書 4 章にヒントがあって、黙示録 11 章で再び登場し、今この時代に救われなかった人たちに、大患難の期間に、パワフルに福音を伝えるのです。

黙示録 7 章で、144,000 人のユダヤ人ビリー・グラハムが出動するのを覚えていますか。

間もなく御使いが空中を飛んで福音を伝え始めますが、今はこの二人です。

二人が力強く「獣のしるしを受け取るな！悔い改めよ！まだ間に合う!!」と預言しています。

この二人、はっきり分かっているのは、一人が預言者エリヤだということです。

それは、話の内容から明らかです。

彼らは天を閉じて、雨が降らないようにすることができます。

ところで、エリヤが天を閉じて雨が降らないように祈った時には、3 年半雨が降りませんでした。

ここで書かれているのと全く同じ期間です。

それから、Ⅱ列王記 1 章。

悪王のアハズヤ王が、「エリヤをここに連れて来い。話がしたい。」と言って、50 人をエリヤの所へ遣わしました。

「王のお告げです。下りて来て下さい。」

「なに？」とエリヤは言って、天から火を下し、50 人を焼き尽くしました。

そこで王はまた別の 50 人を遣わして、「王がこう申しております。急いで下りて来て下さい。」「そうか。」

また火が下って来て、更に 50 人が焼き尽くされました。

3 番目の集団がまた来て、隊長が言いました。「エリヤ様、私にも家族があります。憐れんで下さい。下りて来て、王と少しお話しして頂けませんか。」「分かった。」

このように、エリヤは火を下しました。

それから、エリヤは死んでいませんね。

火の戦車で取り去られましたが、死んではいません。

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている。(ヘブル 9:27)

エリヤは、まだ死んでいません。

そして、マラキ書の最後。これは、特記すべきです。

マラキ書 4 章、旧約聖書の最後の書の、最後の章、最後の節。

「見よ。わたしは、主の大なる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。

彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。」(マラキ書 4:5-6)

神は、エリヤが火の戦車で取り去られてからずっとずっと後に、マラキを通して、「わたしは、エリヤをあなたがたに遣わす。」「主の大なる恐ろしい日が来る前に、エリヤが来る。」と言われているのです。因みに私には驚きだったのですが、マラキ書の最後の句、旧約聖書の締めくくりは、呪いで終わっています。

なぜかというと、旧約聖書の律法は、誰も守ることのできない、呪い以外の何ものでもないから。

新約聖書の最後の句、黙示録 22 章の最後のフレーズは、

主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。(黙示録 22:21)

そうなりますように！

面白いですね。

律法の最後の言葉は呪いで、新約聖書の最後は、キリスト・イエスによる恵みと赦しと憐れみ。

それでマラキ書にはエリヤが必ず来ると書いてあり、どうなるかということ、

そこで、弟子たちは、イエスに尋ねて言った。「すると、律法学者たちが、まずエリヤが来るはずだと言っているのは、どうしてでしょうか。」(マタイ 17:10)

これはマラキ書 4 章に基づいて言っています。

イエスは、「エリヤはもうすでに来たのです。ところが彼らはエリヤを認めようとせず、彼に対して好き勝手なことをしたのです。」(マタイ 17:12)

弟子たちは、イエスが誰について話しているのかを理解しました。

それは、バプテスマのヨハネ。

彼は、キリストのために道を整えるための者でした。

「ちょっと待って。分からなくなってきた。」

ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねさせた。

「私はキリストではありません。」

また、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「そうではありません。」(ヨハネ 1:19-21)

では、イエスはどういう意味で言ったのでしょうか。

イエスが言っているのは、バプテスマのヨハネはエリヤと同じ霊、力、いでたちで宣教したということです。

彼は個人としてのエリヤではなく、エリヤと同じ霊を携えて来ました。

だから、エリヤは主の再臨の前に、マラキ書 4 章を成就するために登場します。

ということで、エリヤが二人の証人のうちの一人であることは確実です。

では、もう一人は誰でしょう。

エノクもあり得ます。

彼もまた死んでいないから。

エノクは主と共に歩み、そして取り去られました。

死んでいないのです。

他に可能性としてはゾロバベルや祭司ヨシュア。

彼らがゼカリヤ書 4 章の燭台、オリーブの木かもしれません。

でも私個人的には、これはモーセだと思います。

カルバリーで十字架にかかる直前に、山の上で、イエスの御姿が変わったのを覚えていますか。

その時、イエスと共にいたのがエリヤとモーセの二人でした。

エリヤは預言者の象徴で、モーセは律法の象徴です。

ここに書かれている二人の証人の様子が、それを物語っていると思います。

エリヤがしたように火を下らせて敵を焼き尽くすだけでなく、水を血に変える力もあります。

水を血に変える力を持ち、地を災いで打った出エジプトの話を知っていますか。

それに加えて、ユダの手紙 9 節に興味深い一文があるのです。

**御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、(ユダ 9)**

モーセはモアブと呼ばれる地で死に、約束の地には入っていません。

しかし申命記には、彼がどこで死んだかは誰も知らない、と書いてあります。

それは今も同じです。

彼は死にました。でも、その場所は誰も知りません。

が、待ってください。

**御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争った (ユダ 9)**

なぜでしょう。

サタンは聖書を熟知しているので、モーセが蘇ってもう一人の証人になる事を知っています。

サタンはそれを食い止めたかったのです。

だから、彼らはモーセの体の事で言い争いました。

しかし、御使いミカエルは、「サタンよ！お前を打つ！」とは言わず、

**「主があなたを戒めてくださるように」と言いました。(ユダ:9)**

モーセがもう一人の証人になるからです。

そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。

**(黙示録 11:7)**

エリヤとモーセは、使命を終えて殺されます。

彼らの死体は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。彼らの主もその都で十字架につけられたのである。(黙示録 11:8)

つまり、エルサレムです。

それが、なぜソドムと呼ばれるのでしょうか。

エルサレムが不道德だから。

なぜ、エジプトなのでしょう。

虚栄に満ちているから。

エルサレム…唯一、神が「わたしの都」と呼んだ町、イエスが心を痛めて涙を流された所が、今はエジプトにたとえられています。

そこが虚栄に満ちているから。

また、キリストを拒絶し、不道德であるがゆえにソドムと呼ばれているのです。

二人の証人が殺されて、次に起こるのは、

もろもろの民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を墓に納めることを許さない。(黙示録 11:9)

古い聖書評釈を見た事がありますが、何百年もの間、人々は、「二人の証人がエルサレムの路上で殺されて、それをどうやって世界中が目撃するのか、エルサレムで起こっていることを世界中が目撃するとはどういうことか理解できない」と言ってきました。

でも今は、簡単に想像できますね。

世界中が、エルサレムで起こっていることを見ることができます。

三日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を墓に納めることを許さない。(黙示録 11:9)

その理由は、

また地に住む人々は、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を贈り合う。

それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである。(黙示録 11:10)

これが唯一、患難期に人々が喜ぶひとときです。

預言者たちが死んだから、人々は喜びます。

贈り物を贈り合うんですよ！「預言者の死！おめでとう!!」

そこら中でパーティが開かれ、「こいつらが俺たちを不快にさせたんだ！そのまま放っておけ！」と言って、唯一人々が喜ぶのが、預言者たちが殺されたこの時。

「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。」(マタイ 5:11-12)

喜びましょう。

賤しめられた時、喜び踊りましょう！

預言者たちもそうしたのですから。

もしあなたが証しのために打ちのめされ、バカにされ、除け者にされているなら喜んで！

あなたも仲間です。

二人の死体は路上に放置され、人々はお祭り騒ぎですが、話はここからです。

しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らに入り、彼らが足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常に恐怖に襲われた。(黙示録 11:11)

それはそうでしょう。

この二人が立ち上がるのです！いきなり！です。「ただいま～～」

すると世界中は恐怖に震え、しかもそれだけではなく、物理的にも震えます。

そのときふたりは、天から大きな声がして、「ここに上れ」と言うのを聞いた。

そこで、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。

そのとき、大地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。(黙示録 11:12-13)

二人の証人が生き返り、天に上げられるのを見て、人々は震え上がります。

その時、地が揺れ、エルサレムの1/10が倒壊し、7000人が死にます。

つまりこのエルサレムの地震で、何千人も何千人も何千人も、もっとそれ以上の人が死ぬということです。

第二のわざわいは過ぎ去った。見よ。第三のわざわいがすぐに来る。

第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。(黙示録 11:14-15)

ここで出てくる7番目のラッパは、携挙のラッパではありません。

中にはここを見て、「ほら!! これが神のラッパだ!」「Iコリント15章の“終わりのラッパ”だ!」

「Iテサロニケ4章の携挙だ!」「だから、携挙は大患難の中間で起こる!」「だから、教会は大患難の半分を経験する!」と言う人たちがいます。

そう言う人たちには、このように言いましょう。

「これは神のラッパではない。このラッパを吹いているのは御使いだ。

これは“終わりのラッパ”でもなく、“神のラッパ”でもない。

これは御使いが吹く7つのラッパの内の一つで、裁きと携挙とは一切関係がない。」

最後の御使いが吹き鳴らすラッパが携挙だ、なんて言う人々に惑わされないように。

つづく

雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。(マタイ 7:25)